西アジア・中央アジアの人々の底力

長野県立南安曇農業高等学校　徳 嵩 廣 治

１．はじめに

生徒が描くこの地域のイメージは、中学校での既習事項から、砂漠・ベドウィン・オアシス・イスラム教・石油といった自然環境による生活文化の様子についてのものが多い。また、最近では、イラクおよびパレスチナ問題やサッカーの国際試合などメディアからの情報が、広く知られるところとなっている。冷戦終結後の新しい世界の枠組みにおいて、中国の台頭とともにイスラムの復興が注目されている。とくに後者では、急激な人口増加と同時にイスラム教への厚い信仰心が再燃しているからといえる。それは、イスラム世界全体に波及し、すべてのイスラム国家の人々の生活に影響を及ぼしている。一方でこのことは紛争のおもな源となり政治的な不安定をもたらす要因ともなっている。その意味において、イスラム教が生活・文化の基盤となっている西･中央アジアの学習をすることは、歴史･公民分野とも関連しその意義は大きいと考える。以下は授業の展開例である。

２．西アジア・中央アジアと石油

①　石油は西アジアに約60～70％

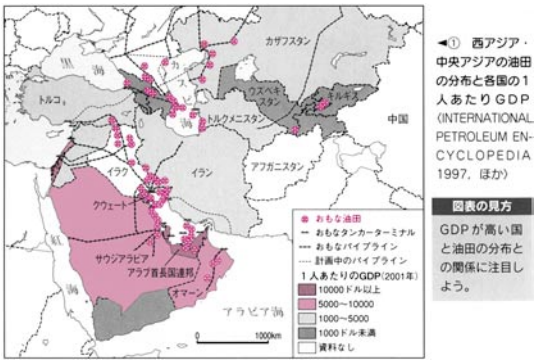
教科書「新詳地理Ｂ　最新版」の第２章「資源と産業」のp.82の㈰「世界のエネルギー資源の分布」の資料や本文からも世界の原油埋蔵量の約60%が西アジアに集中していることがわかる。

②　「西アジアのものはどっち？」

原油のサンプルをみせると生徒の関心を引く。サウジアラビアと中国のサンプルがあったときは、はじめて見る実物の色や臭いとともに、中国産のものに非常に粘り気があり傾けてもなかなかビンから出てこないことに気づき、その違いに驚いていたのが印象的だった。はじめから原産地を明かさないで「西アジアのものはどっち？」などと比較させ考えさせるのもおもしろい。

③　埋蔵量世界一。でも生産・輸出量は？

p.84の「原油生産国と輸出国」のグラフを見ると一見意外なことに気づく。サウジアラビアを除いては西アジア諸国が上位に名を連ねていない。また、西アジアのみならず中央アジアでもp.180の㈰「油田の分布と各国の１人あたりGDP」の資料から産油国と非産油



◀① 西アジア・中央アジアの油田の分布と各国の１人あたりGDP（INTERNATIONAL PETROLEUM ENCYCLOPEDIA 1997，ほか）

図表の見方

GDPが高い国と油田の分布との関係に注目しよう。

帝国書院「新詳地理Ｂ　最新版」p.180

国に経済格差があることが読み取れる（p.174・175の写真も参照）。さらにp.181の本文や㈪「GDPに占める石油収入の割合」のグラフをみるとその割合は意外と低いことやそれぞれの国内においても貧富の差が拡大していることもわかる。これらの原因を考えることにより、この地域の抱える問題や背景を探りたい（帝国書院「新詳地理資料」p.117参照）。そして、このことが「アッラーの前では何人も平等である」というイスラム教の教えに反すると一部で認識され、前述のイスラム復興運動が活発化していったひとつの原因にもなっている（教科書p.301「文明間の関係」参照）。

３．イスラム教徒の生活

①　マクドナルドはハラーム（禁止）？

教科書p.178②「言語分布と総人口に占めるイスラム教徒の割合」は、一目でこの地域でのイスラム教の影響の強さがわかるものになっている。これほど影響力のあるイスラム教について、いわゆる「六信五行」をはじめとする基本的事項の確認をしたい。そこで、以前、この地域の日本人学校におられたことのある同僚の先生にお聴きした話などをもとに、簡単な問題をクイズ形式で出題してみる。

Ⓐ方位磁針やそれがついた時計をもっている人がいるのはなぜか。

Ⓑp.179の写真を見ると、礼拝のとき色の違う服を着ていることに気づくが何か意味があるのか。

Ⓒ日出から日没まで断食をするラマダーンが夏至に近い時期の場合、ほとんど日が沈まない地域に住むムスリムはどうするのか。

などを考えさせながら、教科書p.179や「新詳地理資料」p.116などによりイスラム五行について確認する。この中の「喜捨」は前述の２の㈫平等という概念にあたるものでもある。また、ムスリムの食事については、前章の「衣食住」でも話題になったが、資料「ファーストフードのハラ―ム・ハラル」は興味深いものになっている。

②　結婚は契約？～コーラン～

この他にもコーランには、日常生活における守るべき戒律や生活規範が具体的に細かく決められている。「新詳地理資料」p.116のイラストにわかりやすく掲載されている。

○ 女性は、自分の夫や家族などの者以外の成人男性には、頸・胸・腕などを見せてはいけない。肌を見せない衣服やベールを被るのはそのためで、これは社会的に弱い女性を守るためでもあるようだ。また、サウジアラビアなど男女別学を徹底している国もあるようである。

○ アルコールを飲んで酔っ払うと、人間は理性をなくし、自分が分別をなくしてしまうから飲酒は厳禁。これはアッラーを忘れ礼拝を怠る、賭け事や占いなども同じである。

○ イラストの他にも、結婚は契約であり居住地など結婚生活の条件や日本でいう結納金や離婚時の慰謝料まであらかじめ決めてから行われる、などのきまりがある。

など、道徳的な規範意識が薄れてきた日本の現状と照らし合わせると新鮮ささえ感じる面もある。こうした厳格な生活規範がある中で、イスラム教徒は、基本的に寛容で親切、外国人に対しても好意的だといわれ、来客をたいへん歓迎しもてなしてくれることが多いことを文献で知った。どちらかというと日本人になじみにくく、とっつきにくいと感じていたイスラム理解につなげたい。

③　国旗に緑色・月・星があるのは？

Ⓐイスラム教を信仰する国の国旗は緑を基調にしたものが多いが、なぜか。

Ⓑ国旗の月や星印はどんな意味があるか。

というように国旗から考えていくも楽しい。

そして、「大統領であってもイスラム法に従わなければならない」といわれるようにイスラム法（シャリーア）にもとづいた統治を理想とする地域であることも付け加えておきたい。コーランが憲法ならイスラム法は刑法や商法などの諸法律である。イスラムの復興運動もイスラムの教えに則って、人々が平等で規律ある生活を望んでいることが底辺にあることがわかってくる。

４．西アジア・中央アジアの主要産業

①　この地域の主要産業とはいったい何？

石油などの天然資源の開発に従事する人は一部の人人であり、この地域のイメージとしてすぐに浮かんでくる遊牧民もごく一部の地域に限られた人々であることから、「では、いったいこの地域の主要産業は何なのか」と素朴な疑問がわいてくる。そこで、「新詳地理資料」のp.114～115や教科書p.176～177で調べてみると、サウジアラビアなど一部の地域を除いては「ほとんどの人々が農民である」ということなのだ。そして、乾燥地域でもわずかな湧水や河川の近くでの耕作、またその水をカナートと呼ばれる地下水路を通して利用する「オアシス農業」という工夫がされてきたことを確認する。また、近年では先進国の技術援助によって海水を淡水化し、農業や生活用水、または工業用水としての利用も試みられている現実も紹介する。そして、産油国やオアシス周辺の都市では、驚くべき近代化も進んでいることを写真で確認したい。

②　砂漠地域でスキー？ 観光・商業

「新詳地理資料」p.114では、レバノンのスキーリゾート地を紹介している。他にイランのスキー場も知られている。意外性のある事象であり、ウィンタースポーツのメッカでもある我が長野県としては親しみやすい事例で扱いやすい。その他トルコなど観光業・商業がさかんな地域もある。

５．おわりに

「イスラム」には、本来「平和」・「平和である」という意味が込められているそうである。しかし、現実にはそうではない一面がある。この地域の学習をすることはそうしたことの背景を知ることであり、その本質に反した現実の事象によるマイナスイメージが固定化される危険性を認識することでもある。厳しい自然環境や細かな生活規律の中で、力強く生き抜くこの地域の人々や社会の本来の姿に近づき、国際理解学習につなげることと同時に、そのことにもとづいてアジアの一員として我々日本人が何をすべきかを考えることができたら幸いだと思う。